

# 正論

SEIRON  
2021

8

## 特集 「平時」からの脱却

菅首相に求む安保の有言実行 櫻井よしこ  
対中非難決議阻む国会の闇を告発する 長尾 敬

なぜアビガンは承認されないのか 本誌編集部

厚労省審議会非公開議事録全文掲載

八幡和郎

武漢ウイルスとの戦い 日本は敗北したのか ×木村盛世

特集 切り捨てられる保守  
LGBT法案で残念な稲田朋美氏 阿比留瑠比  
左傾化する自民党を恥じる 西田昌司  
日本共産党の同性愛差別史 松崎いたる  
人権屋、がのさばる入管行政 西岡 力  
ウイグル人救えた入管法改正案 三浦小太郎

特集 自衛隊は  
便利屋にあらず

菅首相、自衛官に名誉と誇りを 犬伏秀一  
「よろず屋」扱いでいいのか 小笠原理恵

特集 メディア  
ぶった斬り

産経新聞が「ダメな」根源的理由 吉田信行  
日経新聞・杉山大志 / 朝日新聞・酒井信彦

# カンボジアで芽生えた 日本への憂慮

地雷処理専門家



高山良一

私はカンボジア国内に埋められている地雷や不発弾を撤去する活動に取り組んでおります。私にとって原点となった出来事は、日本の自衛隊が一九九二年に初めて国連平和維持活動（PKO）に参加し、カンボジアに派遣された経験でした。当時の私は陸上自衛隊で京都にある大久保駐屯地に所属し、中部方面隊（本部・兵庫県伊丹市）がカバーする約四千人から

なる「第四施設団」の人事担当をしていました。「第四施設団」は、道路や橋などを作る旧軍でいうならば、工兵部隊です。内戦に明け暮れたカンボジアでは再建のためにまず選挙が必要でした。その選挙を成功させるうえで道路や橋などのインフラ整備が欠かせない。それで私たちに白羽の矢が立てられたのです。

当時は自衛隊のPKO派遣の是

非をめぐるって国論が二分された状況でした。野党もメディアも、何かあれば追及してやろうという雰囲気でした。一方、国は何としてもPKO派遣を成功させなければならぬ、失敗など許されない。そう考えていました。

ある日、私は団長室に呼ばれ、「明日の朝までにカンボジアに派遣する六百人の部隊の幹部名簿をつくれ」と突然命じられました。

身の引き締まる思いでした。海外での活動は自衛隊にとつても初めてです。隊員の名前を私が書いて「いってらっしゃい」と見送るわけにはいきません。恐らく、任務を成し遂げるまでに、現地では色々と煩雑な出来事が次から次に起こり、これに対処しないといけない。家族からの連絡も大変だろうし、東京との調整も骨が折れることは目に見えていました。とにかく、派遣された六百人を半年後に一人残らずけがをさせずに、元氣な姿で家族のもとに帰す。この使命を果たすには、自分も参加するしかない、そう考えて、私も現地に臨みました。

### PKOで目の当りにしたこと

カンボジアに足を踏み入れたのは十月で、雨期の終わりでした。

た。米国は、北ベトナムの動きを阻止しようと大量の爆弾を投下しました。その後、カンボジアの共産化をめぐる内戦が始まると、カンボジア政府軍とそれを支援したベトナム軍、中国が支援したポル・ポト軍などが入り乱れ、国内の至るところに大量の地雷が埋設されました。その時の不発弾や地雷は内戦後もそのまま残っています。地雷だけで四百万とも六百万個とも言われ、年間八百から九百人ものカンボジア人が命を落としていたのです。

現場に駆けつけましたが、十歳の男の子はすでに亡くなっていました。非常に痛ましい出来事でした。カンボジアの人たちは常にそうした惨事と背中合わせの暮らしを強いられている。皮膚感覚で実感する出来事でした。

「停戦した」とは聞いていましたが、国内はまだ一触即発という雰囲気でした。カンボジア陸軍の施設を仮宿営地にして、そこから三キロ離れた飛行場跡地に本宿営地をまず作らねばなりません。軍隊とは自己完結できる組織です。寝るところから始まって風呂、食堂、トイレと次々に整え、水や電気も自前で確保します。ですが飛行場の跡地に行くにも道路はありません。路盤をつくるにもカンボジア国内にはダンプカーが一台もないのです。結局、六百人が居住する宿営施設を築くまでに二カ月かかりました。風呂も洗濯所もない期間、スコールは「恵みの雨」で、隊員たちは戦闘服を着たまま、一斉に外へ出て、身体や衣服を洗う。はじめはそんな感じでした。

宿営地を定め、外柵を設けて見

回りを配置しましたが、最初は銃剣道で使う銃の形をした木銃をもって警備していました。ところが、それが村の人たちに見すかさされたのでしよう。ある日、外柵が切られ、中に入られて、いろんなものを盗まれてしまいました。それからは実際に銃を携行した警備に切り替えましたが、全てが試行錯誤の連続でした。

ある日近くで突然、「どーん」と大きな爆発音がしました。宿営地に隣接した、のどかな田んぼにいた子供が杭を打とうとしたら、いきなり不発弾が爆発してしまつたのです。

不発弾は一九六〇年代に起こつたベトナム戦争に端を発します。当時、北ベトナム軍がカンボジアを通つて南ベトナムを攻撃し、米国は南ベトナムを支援していまし

六カ月の「格闘」の日々を終えて、私たちの活動は北海道の部隊へと引き継がれました。大過なく終えたことで自衛隊のPKOは今も続いています。世界から賞賛されることもしばしばです。「派遣は成功だった」と社会に認知されるという大きな目標は達成できました。

ですが、私自身の気分はなぜか満足感に浸れる晴れやかなものでは果たしてカンボジアのために何か具体的に成し遂げたといえるのか。隊員の自動車事故でカンボジア人二人が亡くなるという出来事が起きたときも私は事故処理のため奔走しました。家族を訪ねてはいろんな話をしました。涙に暮れる肉親に寄り添いながら、気持ちを受け止める。最終的には事態を収めることが私の仕事で、そう割

り切つてしまえば済む話なのかも知れませんが、晴れて「終わつた！」と気持ちを断ち切る気分にはなれませんでした。

プノンペン空港を離陸した飛行機の窓から、椰子の木が広がる光景がどんどん小さくなっていく。それを眺めながら、「いずれ、もう一度ここに戻つて来よう。そしてやり残したことを気の済むまでやろう」。そんな気持ちで芽生え、どんどん膨らんでいったのです。

人生観や価値観、そして死生観まで何もかも変わつてしまつたような経験でした。人生のスイッチが入つたといつてもいいでしょう。帰国してからの私は英語も勉強しました。カンボジアは仏教国ですから、奈良県の東大寺に足を運んで僧侶の資格もとりました。現地で危ない場面に出くわしても僧侶だった

ら、命は奪われないだろうという思いからでした。そして自衛隊を退官すると、家族の反対を押し切つて、カンボジアに渡りました。

## ハードとソフトの支援

カンボジアで何をするか。いろいろなNGO（非政府組織）と話をしました。ですが、肌合う組織はなかなかありませんでした。というのも私は日本の多くのNGOの活動について疑問を感じていたからでした。

日本企業の善意で地元住民が助けられた、といったニュースを目にするかと思えます。例えばカンボジアのある地域に支援で井戸が建設され、それが美談として報じられるといった具合です。ですが、建設された井戸はその後、どうなっているのでしょうか。

数カ月で故障してしまつた、でもそれを誰も直せないし、直さない。荒れたまま放置されているケースは山ほどあります。それが現実です。残念でおかしな光景です。

根本的に大切なのは、出来た井戸のメンテナンスです。故障や不調にも維持管理をしながら、大切に使うという価値観が重要で、支援するべきはそのためのノウハウなどソフト面なのだとは考えていました。ハードだけを与えて終わってしまうのでは真にカンボジアの自立や復興にはつながらないのです。支援で井戸はできた、でも故障すれば、修理も支援に頼るといふのでは、カンボジアは「支援漬け」の呪縛から一向に抜けられません。

色々と考えた末に私は、自衛隊の定年退職者らでつくる「日本地

雷処理を支援する会（JMASC）」というNPO法人の誘いを受けて現地の副代表になりました。カンボジアの政府組織「カンボジア地雷対策センター（CMAC）」と連携しながら活動することにしました。

しかし、そこでの私は、思うように展望が開けずに悩みました。特に資金的な壁から地雷処理ができず、人手が少なくて済む不発弾処理に専念せざるを得なかつたのです。

私は根本的にやり方を変えよう、と思いました。まず現地人に地雷処理のノウハウを教えるのです。これは地雷処理を「住民参加型」でやろうという、これまでに例がないものでした。

チームの一人が幅一・五メートル奥行四十センチの範囲を除草

し、もう一人がそこを金属探知機で探知する。金属反応がなければ、さらに四十センチ前進し、反応があれば、小さなスコップや刷毛で土を少しづつ取り除いていく。それを繰り返すのです。地雷を作動させないように神経を磨り減らす作業で、僅か四十センチを終わらせるのに一時間以上費やすことだつてあります。防護服を着て四十度を超す炎天下での重労働ですが、この方法が最も安全確実なやり方で近道だと思えました。

現地人を募集すると、約百人も集まりました。CMACからはタイ国境近くの内戦最後の激戦地であるタサエンを紹介され、私は希望が叶つたと喜んで活動をはじめました。

念願だつた地雷処理もできるようになり、タサエンでの活動も順調に

滑り出しました。ところが、それから半年後に、大きな事故が起きてしまいました。作業中、大規模な地雷が地中に埋まっていたことに気づかず、誤つて爆発し七人の仲間が亡くなつてしまつたのです。

私はちょうどその時、一時帰国しようとしてプノンペンにいました。事故の知らせを受けて、すぐに帰国を取りやめ、無我夢中で車を走らせ、現場に引き返しました。到着までの間、私は後悔していました。「自分は取り組みが順調に進んでいたことに有頂天になつていたのでないか」。現場に専門家を張りつけているから大丈夫と考えたが、これは甘かつたのではないか、半年くらいで現場から離れるべきではなかつた、一体自分は何をやっているのか…。

深夜にタサエン村の宿舎に帰り

着きましたが、その日の夜は眠れませんでしたが、七人の葬儀にも出ました。活動も二カ月間ストップしてしまいました。事故のトラウマで夜も眠れなくなつた隊員の家に、毎日毎日通つては、いろいろな話をしました。

ただ、村人だけでなくカンボジア人から辛い言葉を浴びせられたことはありませんでした。むしろ、ある遺族からは「私は息子を尊敬している。だから心配せんではない」と励まされるほどでした。

私は「殉職」した七人の慰霊塔を建てました。ですが、その時、日本の代表者から「あまり余計なことをしてくれない」と注意されました。私はその時、電話が壊れるほど大声を張り上げて喧嘩しました。その代表者は日本側に責任を負わされることを避けたかつた



地雷処理に精を出すIMCCDのメンバー。カンボジア人の手で地道な国土の立て直しが続いている。

ようでした。

しかし、それは小賢しく、誠実に欠けます。いかにあるべきか、どう振る舞うべきかを忘れ、状況を乗り切ることばかりに腐心する、さらにその行動の判断基準は詰まるところ「自分の損得」ではない。狡い立ち振る舞いをしていながら、それが「狡い」ということすら気づかずにいる。日本人はここまで墮ちたのだろうか、ととても悲しかったのです。私は

ました。

また私の地元、愛媛県四国中央市の紙加工会社四社と交渉しタサエン周辺に工場を誘致して約二百六十人が紙加工に従事しています。カンボジアで地雷処理に精を出すNGOはいくつかありますが、活動を村おこしに広げ、地域住民の暮らしの底上げにも取り組んでいるNGOはありません。私たちの活動はほかに類のないものとなりました。

## 日本を思う

カンボジア人はよくも悪くもとても大らかです。時間やお金、約束ごとでも細かなことで人を咎めたりすることはまずありません。彼らの大らかさに私は何度、心が洗われ、和まされ、救われたか。ですが、これは自分にも大らか

この組織を離れようと決心し、自分で認定NPO「国際地雷処理・地域復興支援の会(IMCCD)」を立ち上げ、七人の供養をしながら活動することにしました。

一方でこの時、心底励まされる出来事もありました。応募した百人近い地雷処理チームの面々がほぼ全員やめるとは言い出さなかったのです。今後、地雷処理を通じて生きていく糧を得たい。そうした生活上の事情はむろん、あつたと思います。しかし、彼らは国土が整えられ、安全な暮らしを手にし、野原を自由に戯れる子供たちが増えていく光景を目のあたりにしながら、自分達の「仕事」の意義を実感し、手ごたえを感じていたのです。地雷処理に精を出すメンバーたちは村人から尊敬されてもいました。

ですから、場面によっては約束ごとや金銭、時間にルーズだと見られ、相手との信頼関係を築くうえで深刻な障害となることがあります。細かなことを気にしないのも考えものだと思うことはあります。人もいいし、思慮深い。団結もできる。ただ、いろんな意味で管理が苦手なんだなど感じることはあります。

ただ、コミュニティを大事にして、すぐに仲間同士で打ち解けあえる穏やかな光景を見ると、かつての日本のコミュニティを彷彿とさせます。ここは彼らの愛すべき点です。日本では老いた親の面倒を誰が見るか、をめぐって兄弟同士が押し付け合ったりすることが珍しくないでしょう。カンボジアでそうした光景を見ることなどまじくありません。話を聞いているうち

十七年に及ぶ活動で地雷を撤去した範囲は今では、東京ドーム五十六個分くらいにまで広がりました。もちろん、完全になくなったわけではありませんが、怪我人はほとんど出なくなりました。撤去した土地にはイモの一種、キャッサバを植えます。荒廃していた土地に緑が帰って農地として蘇り、それが広がっていく。その光景を見ると、本当に報われた思いがします。

私はせっかくのキャッサバが安値で買ったたかれている状況を見て、キャッサバを原料に焼酎を製造することにしました。焼酎は日本に輸出され、村にとっても大きな一歩となりました。村の人々は、自分達が育てた農産物をただ売るのではなく、付加価値をつける大切さを知りました。いろいろなアイデアも出されるようになり

に羨ましがこみ上げてくる。そんなことが何度あったことでしょう。彼らと付き合っていてハッとさせられることもしばしばです。むしろ日本人こそ今のままでいいのかと考えさせられることも少なくありません。特に彼らは祖国カンボジアをこれからのいい国にしたい、という思いを誰もが強く抱いています。これは本当に頭が下がります。

例えば、地雷処理チームにはかつてポル・ポト派に属していた人間もいれば、ポル・ポト派に抵抗する側にいた人間もいます。一緒に地雷原の草を刈り、共同作業に精を出すのですが、はじめはチーム編成の際に、「わだかまりがないはずがない」とこちらが気を遣っていました。ですが、それは全く不要だった。どちらに聞いても

「これから自分達の国をよくしていきたい」といいます。忌まわしき過去も乗り越えてとにかく前に向かって歩みを進めたい。これが偽らざる彼らの心境なのです。

先日も大雨で地域の川があふれ、地域が水浸しになることがありました。私は地域を見回り、被害を確かめていたのですが、十五歳くらいの子供でも私を見つけるという「ター（私の呼び名）、ありがとうございます。カンボジア人代表してお礼を申し上げます」といった言葉が気さくな会話のなかで普通に出てくる。日本人の口からこうした言葉を聞くことなどまづないでしょう。国民一人一人に自分はカンボジアの未来を背負っているのだ、という思いが宿ってなければ、こうした言葉は容易に出て来ないと思うのです。

カンボジアは今決して裕福な国ではありません。いろんな壁や困難もあって時間は掛かるかもしれない。でも彼らはそうした現実根差しつつもきつと「いい国」を築き上げていくに違いない。カンボジア人と向き合ってきた私にはそんな確信があります。

心配なのは日本人です。日本人にもかつてはこうした価値観が共有されていきました。ですが、前述したように、自分は汗をかかず、漫然と生きることだけに腐心・専念し、土壇場になると逃げ出し、責任を回避してしまう。そして権利ばかりを主張する日本人が増えてしまっています。

それは日本という国が抱えている矛盾に通じるものです。枉げられた歴史を受け容れてしまつて軍事はタブー化され、空想に浸つて平

和を考えてしまつて。平和を手にする現実根差しした手立てを考へることすら今の多くの日本人はできなくなつています。経済活動にだけ精を出し、それでいいと信じ込んでいます。矛盾を矛盾だとは思わない日本社会が悪しき日本人のふるまいをもたらしつてしまつています。

今一度私たちが先人から受け継いだ日本人の誇りや価値観を取り戻してほしい。アイデンティティを再構築してほしい。カンボジアにいながら、そんなことを願つていきます。

たかやま・りょうじ 昭和二十二年、愛媛県生まれ。四十一年に陸上自衛隊に入隊。平成四年にPKOに参加し退官後もカンボジアの復興に尽力。認定NPO法人「国際地雷処理・地域復興支援の会（IMCCD）」理事長。著書に『地雷処理という仕事』（ちくまプリマー新書）。